

— 奉仕活動 —

新そばの振る舞いで 心通わせる交流会

北海道・芽室ライオンズクラブ

#障害者



芽室ライオンズクラブ（石場とよ子会長／24人）は10月24日、通所型障害者福祉サービス事業所「オークル」の利用者に手打ちそばを振る舞う「ふれあい交流会」を開催した。施設利用者とライオンズ・メンバーが、十勝が誇る食材の一つであるそばを通じて交流する恒例行事。ライオンズ・メンバーが打ったそばを味わうだけでなく、希望者はそば打ち（伸ばし）を体験出来るとあって、毎年この催しを楽しみにしている利用者も多い。

提供するのは、この秋に収穫された新そば。主に乾麺となって、道内はもちろん全国に出荷される「新得そば」の新そばを、打ち立てで食べることが出来るのだから、そのおいしさはひとしおだろう。



この交流会は、手打ちそばの同好会「蕎友（きょうゆう）」との共催で2011年に始まった。当時は、そば打ちは玄人はだしの同好会メンバーに任せて、ライオンズは施設利用者と一緒に食べて交流するのが役割だった。ところが、蕎友はメンバーの高齢化を理由に16年を最後に解散してしまった。会を主宰していた貫田正博さんが芽室ライオンズクラブのメンバーでもあったことから、翌17年からはクラブ主催とし、そば打ちも担当することになった。

事業が継続出来たのは貫田さんの存在が大きいですが、クラブ内にそば打ちに興味を持つメンバーがいたことが功を奏した。貫田さんの手ほどきを受けて、メンバー数人が本腰を入れて挑戦した結果、新たに2人が打ち手となり活動の原動力となっている。



「そば打ちに興味があると言っても、いざ打つとなるとこれが難しい。私を含めて何人ものメンバーが打ち手に挑戦しましたが、なかなかうまく出来ませんでした。日頃から腕を磨いていればまだしも、年に一度の付け焼き刃ではかえって他のメンバーに迷惑をかけてしまう」

同クラブPR担当委員会の竹内司委員長はもどかしい思いを口にした。

とはいえ、打ち手以外にもやるべき仕事は山ほどある。当日振る舞うそばは、施設利用者と職員の分を合わせると約50人分にもなる。おかわりを見越して100食は用意しなければならない。そのため、前日の23日午後、町内にある貸し調理室に打ち手を始め数人のメンバーが集まった。前日のうちにそばを打っておき、そばつゆは貫田さんが自宅で手作りして、翌日オークルに持ち込む手はずだ。



当日には、利用者の体験用にそば生地を用意する他、薬味となるネギを刻み、大きな寸胴鍋でそばを湯がくための湯を沸かし、そばつゆを沸かさない程度に温めておく。タマネギやゴボウ、ニンジンなどを切ってかき揚げも揚げなければならない。ライオンズ・メンバーだけでは手が足りないので、メンバーの夫人2人が駆け付けて調理を担当した。

「2020年、21年はコロナ禍で中止も検討したのですが、利用者の方が『今年もおそばを食べたい。ライオンズクラブはいつ来るの?』と職員さんに尋ねていたという話を聞きました。そこで何とか実施する方法を考え、そば打ち体験と、皆で集まるの食事は見送ることになりましたが、5〜6人の小グループ単位で時間をずらして食堂に入る感染対策を取り、そばの提供だけは行うことが出来ました」（竹内委員長）

そして今回、実に3年ぶりに皆で食堂に集まってそばが食べられることになった。また、施設に四つある作業班から各4人の希望者を募り、そば打ち体験も復活。コロナ禍を乗り越え、以前の姿に戻りつつある。



オークルの利用者が日頃行っている作業は、堆肥（たいひ）用資材の製造・販売や、家庭から出た廃油を原料にしたせっけんの生産、芽室町の資源ゴミ袋の印刷、パンの販売など多岐にわたる。外に出て人と関わる作業が多いのが特徴だ。古川誠施設長に、施設の活動とライオンズとの交流会について話を伺った。

「私たちが大事にしているテーマの一つに、地域の旬のものを利用者さんと共有する、ということがあります。十勝で10月といえば、なんと言っても新そば。ですから、この交流会は私たちにとって本当にありがたい機会です。もう一つ大事にしてきたのが、外部の人たちと接する機会を多く持つこと。一般公募で決まった『オークル』という名前は、町の木である柏の『オーク（OAK）』と『来る』をつないだ造語ですが、『たくさんの人が集まって来る』という意味が込められています。ですから、多くの方に施設を訪問していただき、利用者さんにはさまざまな方と対人関係を築いてほしいと考えています。コロナ禍で接触が制限されてしまっていますが、そばを通じての交流が変わらず続くのは喜ばしい限りです」



そばに添えるかき揚げに使った野菜は、オークル側で用意したものだ。その大半は近隣の農家から提供された野菜だが、その中には利用者が農作業に従事した畑の野菜も含まれている。黄金色のかき揚げが載ったそばは、だしの香りと相まって食欲をそそる。

全員に行き渡ったそば碗は、あっという間に空になり、厨房（ちゅうぼう）の前にはおかわりを求める人の行列が出来た。中には3杯、4杯とおかわりする人もいる。そばを楽しみにしてくれる人たちがいる限り、クラブはこの取り組みを継続していくつもりだ。

2022.12更新（取材・動画／砂山幹博 写真／関根則夫）

Previous



市民に慕われる”松戸さん” 地域PRと奉仕活動に活躍中

— 奉仕活動 —

施設で暮らす子どもたちに 楽しいお買い物体験を

宮崎オーシャン ライオンズクラブ

#障害者



自由には動かない指で財布の中から10円玉をつまみ出すたび、付き添いの看護師が「1まいーい、2まいーい……」と枚数を数え上げる。支払い用トレイに品代の100円がそろると、店員役のライオンズ・メンバーが「ありがとうございました」と頭を下げた。車いすに乗った子は、買ったばかりの本を膝の上に載せ大切に抱えていた。

2カ月に1度、宮崎県立こども療育センターの食堂は売店に早替わりし、宮崎オーシャン ライオンズクラブ（宮永泰宏会長／73人）によるお買い物訓練が行われる。施設の中で生活する子どもたちに買い物を楽しんでもらうと共に、それを通じて社会の仕組みを体験してもらおうという活動だ。子どもたちは皆、この日を心待ちにしている。



宮崎市の中心部から車で30分ほど離れた宮崎学園都市の中に、県立こども療育センターはある。宮崎大学のキャンパスを中心に産・学・住の機能が集約された学園都市の福祉ゾーンに、支援学校やリハビリテーションセンターと共に整備されている。

県立こども療育センターは児童福祉法に基づく障害児療育拠点施設で、小児整形外科病院の機能を備えた県内唯一の施設。脳性まひや小児特有の筋骨格系疾患などを抱え、長期にわたる治療を必要とする18歳までの肢体不自由児、重症心身障害児が入所して生活を送っている。現在入所しているのは、男子14人、女子4人の18人。子どもたちはここで療育支援を受けながら、隣接する県立清武せいりゅう支援学校に通っている。



宮崎オーシャン ライオンズクラブによるお買い物訓練は、1月を除いた奇数月の第2火曜日に実施される。食堂に設けた園内売店は、子どもたちが学校から戻った後の午後3時に開店。買い物用の財布には10円玉が20枚ずつ入っていて、子どもたちは200円分の買い物ができる。クラブはこのお小遣いを用意すると共に、売店で売る品物を提供している。品物の調達は、以前はクラブ・メンバーが購入して持ち込んでいたが、今は施設の職員に担当してもらっている。普段から接している職員は子どもたちが欲しがる物をよく分かっているの、より一層魅力的な品ぞろえが出来るようになった。

クラブの予算は1回につき2万円だが、毎回の支出は1万円を少し超える程度だ。売店には施設の職員が家庭から持ち寄ったり、知人から譲り受けたりした品物も並ぶ。この日は、仮面ライダーが大好きな子のために、お下がりの変身ベルトが用意されていた。

クラブ・メンバーの一人で、現在は337-B地区（大分県・宮崎県）の第1副地区ガバナーを務める下堂 蘭一将さんは、そうして活動の輪が広がっていることに大きな手応えとやりがいを感じると話す。

「職員の方々はライオンズと一緒に活動してくれます。最近では、研修中の学生さんたちも積極的に参加して輪が広がっていて、とてもすばらしい活動に育っていると感じます」（下堂 蘭第1副地区ガバナー）



テーブルの上に並んだ商品はさまざま、ぬいぐるみやおもちゃ、本、キャラクターグッズの他、ジュースにタオル、靴下などの実用品もある。一つ10円から100円と安価なので、200円あればいくつか買うことが出来る。

園内売店が開くのは午後3時から4時までの1時間。まず来店したのは、高度の医療的ケアが必要な子どもたち。付き添いの看護師がベッドを押して売り場を見て回り、その子に合いそうな品物に目星を付ける。意思を伝達するのが難しい子たちだが、看護師からどちらかを選ぶよう促されると、まなざしや手指のわずかな動きで希望を伝える子もいた。

後半に来店したのは、比較的障害の軽い子どもたち。自分で車いすを操って売り場を行ったり来たりする子、迷うことなく本コーナーに向かい本に買い込む子、それぞれに買い物を楽しんでいる。店員役のメンバーは売り込みの声をかけたり、支払いのために一緒に硬貨を数えたり、子どもたちの障害の度合いに合わせて対応する。「鬼滅の刃（きめつのやいば）」グッズ・コーナーの前で「どうしようかな～」と長いこと思案していた子は、メンバーの助言を受けてキーホルダーなど6点をまとめ買い。満面の笑みで、妹たちにプレゼントするのだと話していた。



感染予防のために毎回消毒するので、買い物用の10円玉はピカピカ

子どもたちが買い物に使う手製の財布には、「宮崎マリーン ライオンズクラブ」の名札が縫い付けてある。お買い物訓練はもともと、このクラブが結成当初に始めた継続事業だった。1988年に、女性会員だけのクラブとしては国内で2番目に誕生したクラブだったが、会員の減少を理由に2009年に解散してしまった。宮崎マリーン ライオンズクラブの結成から4年目、当時のメンバーが書いたお買い物訓練についての記事がライオン誌に掲載されている。その中に、お小遣いを使い切った後で欲しいおもちゃを見つけた子のエピソードがある。

「どうするかな、と様子を見てみると、自分の買った品物の中から10円のお菓子を3個出して、これを返すからこのおもちゃが欲しいと、言葉がしゃべれないので身ぶり手ぶりで必死に表現しているのです。私たちは目頭が熱くなってきました。この子どもたちは、最初に接した時は10円玉がどれかも分からなかったのです」（ライオン誌1991年11月号）

そんな宝物のような瞬間がたくさん詰まった活動を、宮崎オーシャン ライオンズクラブは引き継ぐことになる。5年ほど前、地区の家族及び女性チーム（FWT）の役員を務めていた新留千賀子さんは、他クラブに転籍していた宮崎マリーン ライオンズクラブの元メンバーから、お買い物訓練を引き継いでほしいと相談を受けた。宮崎オーシャン ライオンズクラブでは既にいくつかの事業を抱えていたこともあり、新留さんの提案はすぐには通らなかったが、クラブは3年前にこども療育センター委員会を発足させた。



隔月で実施するお買い物訓練を通じて、ライオンズ・メンバーは子どもたちの成長ぶりを見守っている。病状が回復して転院が決まった子がうれしそうに報告してくれたこともある。それとは逆に悲しい別れを経験したこともあるが、子どもたちとの触れ合いは事業に携わるメンバーにとって大きな喜びであり、励みでもある。

「買い物に来る子どもたちの笑顔に会えるのがうれしいし、なかなかうまく笑えない子も楽しんでもらっているのを感じます。今は施設側の受け入れ人数に制限があるので委員会のメンバーしか参加していませんが、この素晴らしい奉仕活動をもっと多くのメンバーに経験してもらいたい」
こども療育センター委員会の委員長でもある興裕周幹事はそう話す。

この日のお買い物訓練後に開かれた委員会では、より良い活動にするための改善策について協議。新会員を中心に声をかけてお買い物訓練の活動を体験してもらおう、施設の保育士さんの意見も聞きながら目標を決め、それに向けて取り組んでいこうと話した。「マリーン」から「オーシャン」へ、お買い物訓練は海のように広く深い奉仕の心で受け継がれている。

2022.12更新（取材・動画／河村智子 写真／宮坂恵津子）

Previous



— フォーカス —

障害のある子に チアで元気と成長を

石原由美子（大阪はなみずきLC）



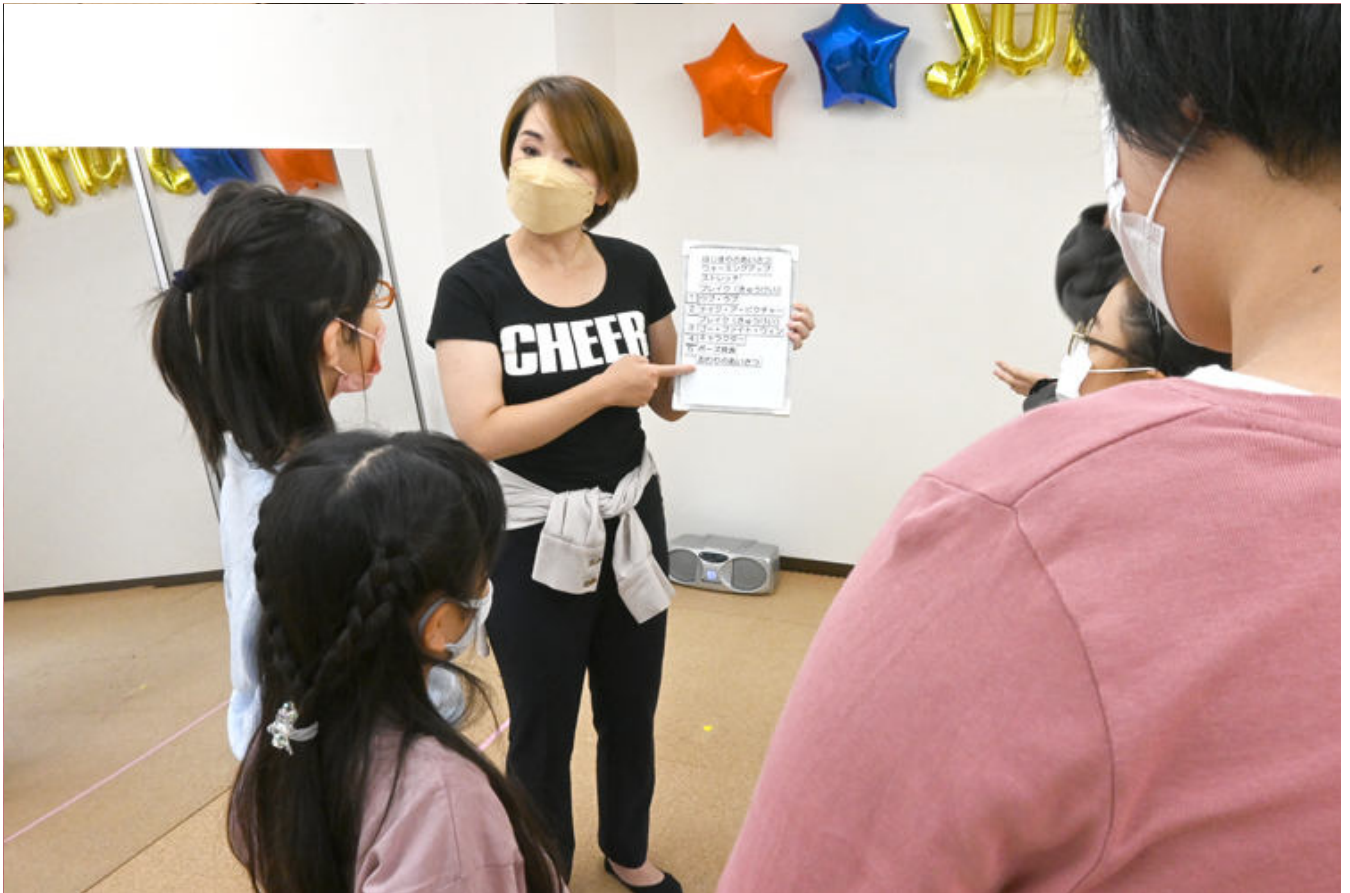
「チアで関西から日本を元気に!」という目標を掲げて、2016年に「チアリーダーズクラブJUMPS（ジャンプス）」を設立した石原由美子さん（46歳）は、年齢や性別、障害の有無を超えてさまざまな特性を持った人たちにチアダンスの指導を行っている。4年前には発達障害や知的障害のある子どもたちを対象にした放課後等デイサービス事業所「スマイルジャンプス」を設立。チアの精神を生かして、さまざまな特性を持つ子どもたちに居場所を提供する事業について話を聞いた。

11月5日に開催した発表会「ジャンプス・カーニバル」は今回が16回目になりましたが、最年少4歳のキッズから最高齢84歳の「オトン・オカンチアリーダーズ」、そして今回初めて放課後等デイサービスの子どもたちも参加し、ジャンプス・ファミリーが大集結しました。

29歳でチアリーダーズクラブ・ジャンプスを設立した当初から、老若男女、障害の有無を問わず、チアで生き生きと毎日を

過ごしてほしいという願いを持って活動してきました。今回のカーニバルでそれを一つの形に表すことが出来たと思います。

「自分の元気で周りの人を元気付ける」というのが、チアの根幹を成す精神です。私は営業の仕事を通じて、チアの精神が社会にも通用するもの、求められているものだ と確信し、それがジャンプスの活動へとつながりました。



私は高校時代までは勉強したり文章を書いたりと机に向かうのが好きな方だったんですが、大学に入ってからすぐにチアリーダーに会い、夢中になりました。卒業後に入社した会社で東京勤務になったのを機に、一時はチアから離れましたが、やはり続けたいという思いが強かった。転職して大阪に戻り、同時に社会人アメリカンフットボール・チームの専属チアリーダーになりました。

転職した先はリクルートの大阪支社で、営業職だったのもものすごく忙しかったです。チアとの両立は大変でしたが、仕事は楽しかったしけっこう成績が良くて、何度も表彰もしていただきました。よく「どうしてそんなに成果が上がるの?」と尋ねられて、自分なりに考えてみたところ、私は常にお客様である中小企業を応援したい、元気になってほしい、というチアリーダーの気持ちで接していたのだと気付きました。だからこそ良い提案が出来て、それによって企業の業績が上がり、私の成績も上がるという関係を作り出せていた。私の強みはチアにあるんだ、と分かりました。

リクルートには6年勤めましたが、4年目にあったキャリア研修で自分がやりたいことを発表する機会があり、私は「チアで関西を元気にしたい」と言ったんです。すると、同じチームのみんなから「やったらええやん」と言われて、「そっか、やったらええやん」と。それで、初めは副業として、チアリーダーズクラブ・ジャンプスを立ち上げました。



まずは子ども向けのスクールを開き、福祉施設に出向いてチアを披露する活動も始めました。初めて障害者施設の催しでチアを披露した時は、登場した途端に大歓声が沸き、中にはステージに上がって一緒に踊り出す人もいて、さながらダンスホールのような盛り上がりでした。その経験から、チアを通してコミュニケーションが円滑になることを発見し、障害のある方や支援を必要とする方に私なりの方法で貢献出来るんじゃないか、と考えるようになりました。そして、チアリーダースクラブ・ジャンプスとして、教育と福祉、地域貢献の三つの分野でチアを生かした活動に取り組んでいこうと決めたんです。

5年前に始めた発達障害や知的障害のある子どもを対象にした放課後等デイサービス事業は、スクールの運営とは全く勝手が違って、膨大な申請書類を提出しなければなりません。せっかくなら挑戦してみようと、書類は専門家の手を借りずに全て自分で書きました。何度も差し戻されながらやっと認可が下りましたが、福祉事業に携わる大変さと責任の重さを身をもって知りました。



こうして立ち上げた放課後等デイサービス「スマイルジャンプス」に通ってくる子は、体に重い障害のある子や、特別支援学校に通っている子、学校に行きづらくなったといういわゆるグレーゾーンの子などさまざまです。ここを大事な居場所にして、ここなら来られるという子もいて、家庭でも学校でもない第3の居場所として、私たちなりのやり方で寄り添えていると思います。幸い、素晴らしいスタッフにも恵まれたので、子どもたちに「こんなすてきな大人がいるんやな」とか、「社会って信頼出来るんやな」と思ってもらえたらいい。

以前、他の事業所の方と情報交換した時、運動療育をやっている方から、「一人ひとり障害の程度が異なるので個別指導でないと難しい」という話を聞きました。でもうちでは、さまざまな特性を持った子が一緒にチアに取り組んでいます。同じ一つの目標に向かってそれぞれにがんばり、お互いに認め合うという体験が、ここでなら出来る。下半身にまひのある子はポンポンを持つと目がキラキラして、両腕を目一杯使って踊ります。自閉症の子が「〇〇ちゃん大好き」と言って、喜んで通ってくるようにもなりました。

私は健常の子にも、障害のある子にも、「チアリーダーの役割は人に元気を与えることだから、まず自分が元気で、笑顔でいようね」と話しています。チアの精神が、日常生活にも浸透していくようになればいいと願っています。

2022.12更新（取材・撮影／河村智子）



いしはら・ゆみこ：1976年、大阪市生まれ。神戸女学院大学卒業。株式会社JUMPS代表取締役。大学でチアリーディングに出会い、卒業後はユニ・チャーム、リクルートに勤務した後、「チアリーダーズクラブJUMPS」を設立。年齢や性別、障害の有無を問わず多くの人にチアを紹介し、17年間でおおよそ5000人のチアリーダーを育ててきた。2018年9月には児童放課後等デイサービス「スマイルジャンプス」を立ち上げた。2019年1月、大阪はなみずきライオンズクラブ入会、2021-22年度会長。